

# ドメスチカスモモ

## 1. 原生地と産地形成

### 1) 原生地と伝搬

ドメスチカスモモの原生地は、ヨーロッパ東部からアジア西部とされている。約 4,000 年の歴史を持つリンゴやセイヨウナシに比べると、栽培の歴史は約 2,000 年程度で、比較的新しい果樹である。

ドメスチカスモモの分類については、次の「分類と品種」の項で述べるが、プルーンとはドメスチカスモモのうち、乾果に適する品種群を呼ぶ俗称である。なお、欧米で乾果に用いる品種は全てドメスチカスモモに属するものである。これは、ドメスチカスモモだけが、乾果を作るときに種子を除去しなくても醗酵せず製品になるためである。

### 2) わが国における栽培状況

ドメスチカスモモのわが国への導入の歴史は定かではない。一般には明治時代の初期にヨーロッパや米国から‘グリーンケイジ’‘イエローエッグ’‘ブラッドショウ’等の 8 品種が導入され、わが国でのドメスチカスモモの栽培が始まったとされている。導入後、全国各地で栽培試作されたが、気温が高く雨の多い西日本では病害や裂果が多発し、品質不良で成功しなかった。しかし、生育期間中に比較的雨の少ない東日本で栽培に成功した。

ドメスチカスモモの栽培面積は、昭和 61 年から 186ha と増加し始め、平成 15 年には 534ha となっている。主産県は、長野県が 305ha と 57% を占め、次が山形県 21.3ha、埼玉県、山梨県、福島県、広島県等である。

## 2. 分類と品種

### 1) 分類

スモモ (plum) は、バラ科サクラ属スモモ区に属する落葉樹の総称で、約 30 種ある。そのうち、食用、台木等として利用されているものは約 10 種で、大きく欧亜系 (ドメスチカスモモ、インシチチアスモモ、ミロバランスモモ)、東亜系 (ニホンスモモ等)、米国系 (アメリカスモモ等) の 3 系統に分類される。

なお、ヨーロッパスモモという言葉は、ドメスチカスモモを指す場合と、インシチチアスモモ等を含めていう場合がある。

ドメスチカスモモは 6 倍体で、染色体の数は体細胞 ( $2n$ ) で 48 本となっている。これはアジア西部からヨーロッパ東部にかけて分布する 2 倍体 ( $2n=16$ ) のミロバランスモモと、ヨーロッパからシベリアにかけて分布する 4 倍体 ( $2n=32$ ) のスピノーサスモモの自然交雑によってできたものとされている。2 倍体と 4 倍体との交雑では、一般に稔性のない 3 倍体を生じる場合が多いが、減数分裂時の遺伝的組換えや交雑による遺伝変異の拡大等、なんらかの理由で 6 倍体のドメスチカスモモができたものと思われる。

ドメスチカスモモを果皮色や用途によって 5 グループに分けている。その 1 つにブルー・グループがある。当グループは果皮が赤から紫で、甘味が多く、果汁が少ないので乾果に適している。代表的な品種は 'フレンチ' 'シュガー' 'インペリアル' 等で、産業的に最も重要なグループである。米国カリフォルニア州等の乾燥する産地では熟期がきても収穫せず、樹上において水分を蒸発させ、糖度を高めてから収穫して乾果にしている。わが国ではほとんど生食用として利用している。

第 2 のレイネクロード・グループはグリーンゲイジ・グループとも呼ばれ、果皮は緑から淡赤色で缶詰用が主である。第 3 のイエローエッグ・グループは、果皮は黄色で美しいが、品質がやや劣るので缶詰用が主となり、栽培は少ない。第 4 のインペラトリス・グループは、果皮は青紫から黒紫である。果実が大きく、果汁が多いため生食用として重要で栽培が増加している。第 5 のロンバード・グループは、果皮は赤で品質が

劣るため加工用に使われる。

なお、ドメスチカスモモの果皮色は前述したように多くの変化があるが、果肉はほとんどが黄色である。

## 2) 品種

### (1) 早生品種

#### ○チェーアン (Chairn)

果樹研究所で保存されている品種であり、欧米から導入されたものと思われるが、今のところ欧米の品種の記載には見当たらず、来歴は不明である。

樹姿は直立性で、樹勢はやや強である。枝の発生は密で、花芽の着生はやや多い。果実の大きさは中で 40~50g である。果形は短楕円で、果皮は黒紫色、果粉は多い。縫合線は浅く不明瞭である。裂果はほとんど見られない。果肉は濃黄色で、肉質は軟かく密で、果汁の多さは中、繊維はやや多い。甘味は多く糖度は 15~16 度、酸味はやや少なく pH4.0 位で食味は良好である。核はやや薄くて、大きさはやや大、形は楕円形で半粘核である。

開花期は、プルーンの中では最も早いグループに属する。収穫期は早く‘ツアー’と同じ位か少し遅い。自家不和合性で受粉樹を必要とする。この品種は‘トレジデイ’とよく似ているが、PRSV に非感染と判定されているところが異なる。

#### ○ツアー (Czar)

イギリスのソープリッジワースのトーマス・リバーズ氏によって‘プリンス・イングルバート’に‘アーリー・プロリフィック’の花粉を交雑して育成された。初結実は 1874 年で、丁度この年にイギリスを訪問したロシアの皇帝 (Czar) に因んで命名された。

樹姿は直立性で、樹勢は中位である。枝の発生はやや少なく、短果枝の着生も多くないので、花芽は他のドメスチカスモモと比較して少ない方に属する。

果実の大きさは 35g 前後で小さい。果形はやや卵円気味の円形で、果梗が細く短い。果皮は濃紫色から完熟すると黒紫色になる。果粉はやや

少ない。裂果はほとんどない。果肉は黄色でやや濃く、肉質は軟かく、やや密でねばりがある。果汁の多さは中位で、繊維も中である。甘味はやや多く 14~15 度であるが、条件のよい年は 16 度を超える。酸味はやや少なく pH3.9~4.0 である。食味は早生としては良好である。核は離核で、形は楕円~短楕円、大きさは小である。

開花期は遅く 4 月下旬になる。収穫期は 7 月下旬~8 月上旬である。早生品種で、着色も早いため、早採りされることが多いが、甘味が少なく、酸味が強い果実となるので、品質がよくなるまで待つて収穫する。自家和合性が強く結実は安定している。

その他、‘トレジデイ’等がある。

## (2) 中生品種

### ○シュガー (Sugar)

米国原産である。ニホンスモモの‘サンタローザ’や‘ビューティ’を育成したことで知られるバーバンク氏が、‘エージェン’の実生の中から選抜して、1899 年に発表した品種である。

樹姿は中~やや直立性であるが、ドメスチカスモモとしては開く方である。樹勢は強く、枝の伸長も旺盛である。短果枝の着生は多く、花芽の着生も多い。自家和合性があり、結実は良好である。

果実の大きさは 50g 前後で、中位である。果形は楕円形で果梗近くにくびれはない。玉揃いはよく、片肉果はほとんどない。果皮は赤紫色でブドウの‘巨峰’のような黒紫色にまでは至らない。裂果は果頂部に少し発生するが、軽いものが多い。果肉は濃い黄色で、肉質は軟かく密で、果汁の多さは中位である。「シュガー」という名前が付いているように糖度は高く 16 度位で、年によっては 18 度を超すこともある。酸味はわずかで、香気が少しあり食味はよい。日持ち性はやや良である。核は半粘核で、大きさはやや大、形は比較的細長く楕円形である。品質は上の部類に入るが、最上まではいかない。

開花期は遅く、モモより 7~10 日遅いが、ドメスチカスモモとしては特に遅くはない。収穫期は果樹研究所で 8 月中・下旬で、ドメスチカスモモとしてはやや早い方である。果実が集まって着生するので、灰星病

が発生すると広がりやすいので注意する。また、8月以降に熟すので、山林等があると吸ガ類の被害も受けやすい。

‘シュガー’は PRSV に感染している。このウイルスは品種により難易はあるが、熱処理で無毒化（ウイルスフリー）することができる。大量の花粉で受粉すると伝染することがあるが、通常は接ぎ木伝染なので、無毒の苗を植えるようにする。

#### ○ローブ・ド・サージェン (Robe de Sergeant)

フランス原産である。わが国には明治時代に導入され、長野県で特産的に栽培されてきた。

樹姿はやや直立性で、樹勢は強い。枝の発生はやや密で、短果枝は着きやすく、花芽も多い。自家受精しないが結実は悪くない。

果実の大きさは 30～40g で小さい。果形は短楕円形で、果梗近くのくびれはない。果皮は赤紫～濃紫色になり、完熟すると黒紫色に近くなり、白い果粉におおわれる。玉揃いはよく、片肉果もほとんどない。裂果は果頂部に少し発生することがある。果肉は緑色がかった黄色で、肉質は軟かく密で、果汁は中位である。糖度は高く 18 度前後で、条件のよい年は 20 度近くに達することもある。酸味は適度にあり、香りもあって、濃厚な食味である。核は離核で、形状は短楕円に近い楕円形である。開花期は中ないしやや遅い。収穫期は 8 月下旬で、‘シュガー’に続いて収穫される。

本品種は糖度が高く、上品な食味を持っていて、品質はドメスチカスモモの中でも最高クラスにある。この品種も PRSV に感染しているため、無毒化が必要である。

その他、‘スタンダード’‘モーホーク’‘イエロー・エッグ’等がある。

### (3) 晩生品種

#### ○フレンチ・インブリード (French Improved)

本品種は「フレンチ・プルーン」と総称されるグループの 1 系統であるが、文献がなくイギリスの品種目録に、1947 年にフランスから導入して保存していると記載されているだけで、特性の説明はない。

樹の開張度は中位で、樹勢はやや強い。枝の発生は密で、花芽の着生も多い。

果実の大きさは25～30gと小さい。果形は楕円形で、果皮は淡赤紫色で、肉質は軟かくち密で、甘味が多く、酸味は少なく食味は優れている。核は離核で楕円形、表面は滑らかで小さい。

開花期は中で4月中旬、収穫期は8月下旬～9月上旬でやや晩生である。自家和合性で結実は良好である。PRSVに感染している。

#### ○インペリアル・エピネウス (Imperial Epineuse)

1870年にフランスの大きなプルーンの産地であるロットバレーのクライラックで発見された。米国にはフェリックス・ギレー氏によって1883年にカリフォルニアに導入されたが、広く栽培されるようになったのは1990年代に入ってからである。

樹姿は中からやや開張性で、ドメスチカスモモとしてはよく開く方である。樹勢は極めて強い。枝の発生は多く、密である。花芽の着生も多い。

果実の大きさは約60gでドメスチカスモモとしてはやや大きい。果形は短楕円形で、果梗近くがわずかにくびれる。縫合線は浅くやや明瞭である。片肉果は少なく、玉揃いはよい。果皮は、くすんだ赤～赤紫色で果粉はやや多い。果肉は緑色を帯びた黄色で、肉質は軟かくち密で、果汁の多少は中位、繊維はやや少ない。糖度は高く17～18度で、天候のよい年は20度を超える。酸味は少なくpH4.5位で、食味は優れている。核は完全な離核で、形状は楕円形で薄く、大きさは中位である。

開花期は遅く4月下旬、収穫期も遅く8月下旬～9月上旬である。部分的に自家和合性を持つとされているが、結実は多くない。PRSVには非感染である。

#### ○ケンブリッジ・グリーン・ゲージ (Cambridge Green Gage)

樹姿はやや開張性で、樹勢は極めて強い。枝の発生は密で、花芽の着生も多い。

果実は40g位でやや小さい。果形は上下に押し潰されたような感じの扁円形で、果頂部は浅くへこむ。縫合線は浅く、わかりにくい。果皮は

緑黄色であるが、果粉が多く白く見える。裂果は少し発生する。果肉は濃い黄色で、肉質は軟かく密で、果汁、繊維の多少はともに中である。甘味は極めて多く、糖度は 20 度を超し、酸味はわずかで食味は極めて良い。核は離核で形は短楕円形。開花期は 4 月中旬、収穫期は 9 月下旬である。

その他、‘コーテス 1418’ ‘ビクトリア’ ‘サン・プルーン’ ‘プレジデント’ ‘エンプレス’ 等がある。

### 3. 形態と生理・生態

#### 1) 形態と結果習性

ドメスチカスモモは、樹高が3～8mの中高木の落葉果樹である。樹形は円頭形となる。枝にトゲはない。若い新梢は毛じが少しある。葉は倒卵形～楕円形で、葉縁は鋸齒、葉の長さは5～10cm、やや厚く表面は暗緑色で網脈が明らかである。葉の裏面は淡色で毛じがある。

花は葉と同時かまたは少し遅れて現われる。花は直径2.5cm、白色で大きく花べんは5枚である。果実は楕円形または倒卵形で、基部が乳頭状になるものが多い。梗あは浅くて狭い。果皮は青黒色または黄色で不明瞭な小斑点がある。中には黒紫色の独特の果皮色を有するものもある。果肉は黄色で硬く、甘味及び酸味があり、芳香もある。核果で核は大きく、離核と粘核がある。

ドメスチカスモモは、葉芽と花芽が同じ場所に着く複芽である。よく伸びた発育枝を1/3位切り返すと、先端の数本以外の中央部から基部にかけての枝は短果枝となる。短果枝は花芽が密生して着く、いわゆる花束状短果枝である。この短果枝が結実の主体を担う。

結果習性は、1年目に伸びた新梢に花芽ができて、2年目に開花して果実を着けるもので、側生花芽である。即ち、前年に伸びた枝のえき芽を利用することになる。このように、えき花芽にも着果するが、短果枝のうち特に花束状短果枝に多く着果し、実止りもよい。

#### 2) 生態と花芽分化

新根の活動は3月中旬に始まり、6月に最大となり、7月中旬に一度活動を停止する。その後果実の生長が終った9月から第2回の伸長をし、11月下旬から休眠に入る。新梢の伸長は4月中旬に始まり、5～6月に最高となり、7月中旬に停止する。

果実は4月に開花結実した後、肥大を重ね、6月に生理的落果を経過して、9月の収穫期まで肥大を続ける。

花芽の分化は8月中に完了し、以後花器の形成が行われて翌年の春を迎える。一般にドメスチカスモモの多くの品種は、ニホンスモモより発

芽や開花の遅いものが多い。

### 3) 気象と土壌

#### (1) 気象

ドメスチカスモモは、夏に雨の少ない比較的温暖な地中海性気候が適していると考えられる。わが国では長野県を筆頭に栽培があるが、適地は夏の生育期間中に雨が少ないことが条件となる。長野県に栽培が多いのは主としてこの理由による。収穫前の9月上旬に雨が多いと灰星病等の果実腐敗病が多発し、さらに裂果が生じるからである。

ドメスチカスモモは耐寒性もかなりあり、年平均気温が10℃前後の所でも生育するが、-4℃以下の低温では花器や幼果が凍死する。しかし、わが国での適地を決める要因は、ほとんど夏期の降雨量の多少で、年間雨量が600～1,200mmの所に分布するが、乾燥気味の方が品質のよい果実が生産される。日照は年間2,000時間以上あることが望ましい。

開花期は5月に入るため、晩霜の害は受けにくいですが、霜の通り道や冷気のあたりやすい凹地では防霜対策が必要である。収穫期は9月になるので台風の被害を受けやすい。特に西日本では台風に注意する必要がある。常時風の強い所では、防風林を設置する。

#### (2) 土壌

ドメスチカスモモは、他の果樹に比べて土壌を選ばない。これは若木のうちは生育旺盛で、肥料の吸収力が強いので、やせ地でも栽培が可能である。しかし、長年の均産を図るためには、耕土が深く排水がよく、通気性に富んだ土壌を選ぶ必要がある。

## 4. 栽培管理

### 1) 品種の選定

ドメスチカスモモには品種が多く、検討不十分な品種がある。乾果用と生食用の区分をはっきりさせ、生食用では特に品質の優れた食味良好な品種を選ぶ必要がある。主力品種は 2~3 品種に絞り、受粉樹の選定を誤らないことが大切である。

### 2) 苗木の繁殖

ドメスチカスモモは 6 倍体であり、さらに種々のグループがあるため、台木に対する接ぎ木親和性も品種によってかなり異なると思われる。しかし、残念ながら台木に関する試験成績は少ない。

ミロバランスモモは一般に親和性が高く、耐湿性、耐干性、耐寒性があり、さらに挿し木繁殖が可能な系統があり、台木として広く用いられている。インシチチアスモモはドメスチカスモモと接ぎ木親和性が高く、土壌適応性も広いので台木として使用される。

なお、台木及び品種によってはウイルスの PRSV を保毒しているものがあるので、無毒の台木及び穂木を用いることが大切である。

### 3) 植え付けと若木の管理

定植は 11~12 月の秋植えと、3~4 月の春植えがある。気候の温暖な関東以南では、秋植えをして根の活着をうながすと翌春の生育が順調に行われる。しかし、東北北部や北海道のように冬が早く来て年内に根が活着しない場合は、寒さによる植え傷みが出やすい。また、積雪の多い地方では雪害や野ネズミの食害を受けるので、春植えの方がよい。春植えでは発芽前の 3 月中に植え付けを終り、根つきをよくしないと後の生育が不良となる。

一般に 7m×7m の正方形植えでは 10a 当たり約 20 本植えであるが、若木時代の生産を高めるためには間伐予定樹を 5 点植えに約 12 本入れ、合計 32 本植えでスタートしてもよい。並木植え栽培では 5m×2m の 10a 当たり 100 本植えとして生産をあげ、6~7 年生で間伐し、5m×4m の 10a 当たり 50 本植えとする。雨除け等の施設化をする場合は、並木植えの

方がよい。この場合の植え付け距離は、5m×3mの10a当たり約67本が適当である。

ドメスチカスモモは一度樹が衰弱すると回復が難しいので、若木の管理は十分に作る。ドメスチカスモモは直立性の品種が多いから、そのような木では竹等で誘引して開かせる。先端の2～3芽が勢いよく伸びるので、主枝延長枝以外の強い枝で、方向のよくないものは除くか、捻枝をして主枝と競合しないようにすることも必要である。

#### 4) 整枝・剪定

##### (1) ドメスチカスモモ樹の生育の特性

整枝・選定を行うに当たり、樹の生育の特性を理解しておく必要がある。ドメスチカスモモが他の果樹と異なる生育特性を要約すると次の6点があげられる。

①幼木時代に樹勢が旺盛で直立しやすい。②頂部優勢性が強く、下部からの枝の発生が劣る。③発生角度の狭い枝は強勢となりやすく、その先の枝は衰弱し回復しがたい。④成木になり結実が多くなると成り枝は下垂し開張する。⑤着果過多によって樹勢が衰弱すると回復が難しい。⑥傷口の癒合が遅く、枯れ込みや病気が入りやすい。

##### (2) 目標とする樹形

ドメスチカスモモの基本的樹形は4本主枝の開心形とする。ただし、主枝は4本あり、しかも各主枝間の間隔は40cm前後とるので、遅延開心形に近い樹形となる。開心形の整枝の要点をまとめると次の3点となる。①主枝は4本とし、亜主枝的な枝は養成しない。主枝の上に側枝や結果枝を適当に配置して結実部分を多くする。②第1主枝は地上40～50cmの位置に置き、その上約40cm間隔で第2、第3、第4主枝を置く。③樹高は諸作業に便利のように、地上3.5m以内にとどめる。

ドメスチカスモモは初期生育が旺盛で直立しやすいが、成木になると樹勢は落ち着いてくる。頂部優勢性が強いいため下部からの枝の発生が弱くなりがちである。発出角度の狭い枝は強勢となり、他の枝の生長を弱めやすい。

幼木時代、成木時代の整枝・剪定の詳細については『特産果樹』を参

照のこと。

### (3) 施設栽培と主幹形仕立て

これまで述べた仕立て方は露地栽培の場合であるが、今後施設栽培が多くなると仕立て方も変わらざるを得ない。雨除け等の施設栽培では主幹形の細型紡錘形仕立てとする。近年は露地栽培でも主幹形仕立てを取り入れる産地が多くなってきた。主幹形仕立ての場合の植え付け距離は品種や土壌によって異なるが、一般的には列間 4～5m、樹間 2～3m の並木植えとする。樹高は作業の便を考慮して 3.5m 以内とする。

## 5) 肥培管理

### (1) 施肥

若木のうちは樹齢に応じて 1 樹当たりの施肥量を多くして行くが、リン酸は窒素の約半量、カリウムは窒素の約 70～80% が適量となる。14 年生以降は成木園 10a 当たり 18 本植えとして窒素 14kg、リン酸 8kg、カリウム 12kg となっている。この場合の目標収量は 10a 当たり 3t である。

施肥の時期と量は秋肥として 9～11 月に窒素は年間施用量の 70～80%、リン酸とカリウムは全量施す。春先の 3～4 月に前年の結果量や開花状況を見て窒素の残り 20～30% を施し、その後の追肥は原則として行わない。ただし、特に樹が衰弱している場合は、収穫直後に速効性の窒素肥料を施す。有機物の補給は草生栽培でも行うが、厩肥や堆肥等の有機質肥料の施用効果は大きい。

### (2) 土壌管理

ドメスチカスモモは若木のうちは生育が旺盛で、肥料吸収力が強いいため、やせ地でも栽培が可能とされているが、そのような所では収量があがらず、経済寿命が短い。従って、毎年の均産を図り、長期間にわたって経済栽培をするには、平坦地の肥沃な、排水のよい通気性に富んだ砂壤土が適地となる。

## 6) 結実管理

### (1) 受粉と結実確保

ドメスチカスモモには自家和合性の品種と自家不和合性の品種があ

る。自家和合性の高い品種としては、‘ツアー’‘シュガー’‘パープル・パーショア’‘イエロー・エッグ’‘ビクトリア’‘スタンレー’、フレンチ・プルーン等がある。自家不和合性の品種としては、‘トレジデイ’‘ロブ・ド・サージェン’‘スタンダード’‘ハンガリアン・プルーン’‘プレジデント’等がある。

ドメスチカスモモには交雑不和合性があるとされるが、よくわかっていない。ドメスチカスモモは虫媒花であるから、ミツバチ等の訪花昆虫の導入を積極的に行う。必要に応じて人工受粉を併用する。

ドメスチカスモモは6月に大きな生理的落果がある。その防止法は他の果樹と同様である。

## (2) 摘果

摘果により適正着果に心掛け、果実の肥大や玉揃いを良好にして糖度を高めるとともに、隔年結果を防ぐ必要がある。摘果は予備摘果と本摘果（仕上げ摘果）の2回に分けて行う。

予備摘果は満開後30日頃に実施する。本摘果は満開後50～60日頃に実施する。この頃の果実は親指大の大きさになっている。この時も小玉果、奇形果、さび果等を摘果して樹勢や枝の状態に合わせた適正着果に努める。一般に成木では枝の長さを基準にして着果数を決めている。即ち、小玉品種では5cmの枝に2果程度、中玉品種では10cmの枝に3果程度、大玉品種のものは10cmの枝に2果程度とする。また、小玉品種は短果枝に2果成らせてもよいが、葉数が少ない場合は1果とする。大玉品種は葉数で15～20枚当たり1果とすることを基準としてもよい。

## 7) 裂果防止

成熟期に雨の多いわが国では裂果の発生が多く、これがドメスチカスモモの安定生産を阻害している。

裂果を防止する最も有効な手段は、果実を降雨から守ることである。このためには、雨除け施設による裂果防止が最も有効である。また、雨除けをすることは裂果防止だけでなく、腐敗果の軽減と商品性の向上にも役立ち、各地で採用されている。雨除け施設は1樹ごとにシート等の被覆資材で被覆する簡単なものから、パイプハウス型のものまでである。

被覆は収穫予定より 30 日位前に行い、収穫が終わったら取り除く。土壌は乾燥するので、被覆期間中の灌水を忘れないことが肝要である。また、雨除け栽培ではダニ類の発生が多くなるので防除を十分にする。

## 8) 病虫害防除

病害としては、灰星病、炭疽病、樹脂病、ウイルス病がある。ウイルス病の PRSV に感染している品種としては‘トレジデイ’‘シュガー’‘ローブ・ド・サージェン’‘スタンダード’‘エムプレス’等が知られている。これは接ぎ木伝染のほか花粉伝染や種子伝染をするので、受粉と接ぎ木には十分に注意する。ウイルスは現在防除法がないので、保毒、被害を確認したら伐採焼却処分をする。

害虫としては、ヤガ（アケビコノハ、アカエグリバ、ヒメエグリバ等、コスカシバ、シンクイムシ類（ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ、モモノゴマダラメイガ等）、アブラムシ類（モモアカアブラムシ、モモフキアブラムシ等）、カイガラムシ類（クワシロカイガラムシ、サンホーゼカイガラムシ等）の被害がある。ハダニ類ではナミハダニの被害が主である。これら害虫の生態及び防除については省略するので、専門書を参考にされたい。

果実に傷を付け果汁を吸う害虫としてはツチバチ、スズメバチ、ハエ、アブ等がある。これらは砂糖を加えたオレンジジュースを入れたビンを枝に吊り下げ、誘引して殺す。

## 5. 消費

### 1) 収穫と調整

ドメスチカスモモは果皮が濃紫黒色のものが多く、適熟期の判定が難しい。特に着色の濃い‘スタンレー’‘エムプレス’等では注意する。また、裂果を回避したり、灰星病やヤガの被害を回避するために早採りして、酸味の強い硬い果実が出荷されて消費者の不評を買っている。実際においしい果実を消費者に供給するには、糖度は一般に 14 度以上にする必要がある。酸度は 1%を超すと強酸となるので、0.6~0.8%が理想といえるが、糖度が高ければ酸度は 1%を超えても濃厚な食味として評価される。硬度は 10 ポンド以上では硬過ぎ、3~5 ポンドが適当である。果汁は少ないとかさかさした食味となるので、多い方が美味しい。

収穫に際しては、果粉（ブルーム）を落とさないよう注意して扱う。灰星病の被害果は出荷途中で健全な果実を腐敗させるので収穫、選果の際に除去する。

### 2) 加工

わが国のドメスチカスモモは加工仕向け量は 10%前後で、ほとんどが生食消費されている。加工製品としては乾果、缶詰、エキス等であるが、この中では乾果が一番多い。乾果の成分としては、炭水化物では糖質が多く、無機質ではカルシウム、リン、カリウム等のミネラルが多く、ビタミン類ではカロチン、ビタミン A 等が多い。このため、貧血防止、食欲増進、疲労回復等に役立つばかりでなく、良質の繊維を含んでいるので便秘によいとされている。